
どらむちよん

ジョゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どらむぢよん

【Nコード】

N9874J

【作者名】

ジョゼ

【あらすじ】

いままでに創作した詩のようなものはきだめ。
全体的に暗いです！

短いどらむちゃん

「ゴシップ」

汚れる時間

さらさらの蜃気楼

産まれたてのリアリズム

騒がしさを病と知るなら

まどろむ自分はいつも傍観者

熱砂の渦巻く月光下道で

大気を蝕み天を泳ぐなら

どうか精神をかきむしらせて。

「グラフィティ」

ぼくのところに巢食いしカオス
難攻不落の最後の砦
侵食するのはあなたのセオリ―
優越劣勢レクイエム

ぼくらはいつも間違っよう
いつになったらあなたは消える？
ぼくはそろそろたえられない

「フライング」

おぼつかない眼で
たどたどしい思考で
きりきり舞いながら
このまっすぐな道を
一步一步守るように
信じる事が出来たなら
そこから飛び立つ
かぜになる。

短いぞらむぢよん？

く		は	
ら	ゆ	ら	き
く	ら	は	ら
ら	ゆ	ら	き
呼	ら	濁	ら
ん	弾	る	曇
で	け		る
る	る		

ああいつも僕は立ち尽くす
いのちのすべてが知りたくて
がむしゃらに撫でる
ほんとうの夜叉
しつこく、しつこく、
いざなうみなもへ

シークエンス

どうしてそらはぼくをかこむの
どうしてかぜはぼくをさらうの

どうしてひかりはぼくをさがすの
どうしてめまいはぼくをかばうの

どうしてちょうはぼくをわらうの
どうしてつばさはぼくをつなぐの

どうしてせかいはぼくをみないの
どうしてつきはぼくをみてるの

どうしてあなたはぼくをつぶすの
どうしてぼくはあなたがわかるの

不安

地に足がつかない感じ

フワフワしてイライラする

不安

消したくても消せない

心が奇妙に汗をかく

何もかも理解したいのに

真実はいつも誰かのなかに

短いどらむぢよん？

疲れ果てたなんて言わないでおくれ

廃屋に横たわった肉体に

閉じた瞼を、なぜ、かたくなに

諦めたなんて言わないでおくれ

爪を立てたその皮膚が例えば

絶対の否定を証明しても

突き詰めて考えたとき

ああもういやっておもう

シグナルかもしれない。

問い詰められてひるんだとき

ああもういいやつとおもう

何かが咲いているのかもしれない。

避けようの無い痛み
毒はまわる今日も
血液を出し切ろうが
脳をたたきつけようが
呼吸器官を潰そうが
結果は同じ
それすらも自由な選択
死ぬ意味も生きる意味もわからないのなら
何処に居たって同じじゃないのか？

短いどらむぢよん？

「孤客」

あるだろうか この先に
僕の思い描いた
僕の欲しかった
あの日の真実が

あってほしい この先に
僕の見たかったモノ
僕の価値ではかるモノ
あの日の物語が

でも 無くてもいい この先に

僕の汚さ

僕の狡猾さ

あの日の強がり

僕の心に重くのしかかる

求めずにはいられないけれど

吐き気がするほど恐ろしい

「にじ。」

約束をした

嘘をつかれた

裏切られた

絵の具が足りないの？
ケント紙なら持つてるよ

小さくてもいいから
プリズムになりたい

「黒いテディベアのめだまはガラス玉」

オルゴールの音色に狂う

破れたカレンダーになぞる愛を

ぼくらはただ黙って見下ろすだけだ

小さく悲鳴をあげて

嘲笑してみるピエロの踊り

満ちては欠ける

欠けては満ちる

薄暗いお昼に並んだ

まるい皿の割れた音で

ばちんと目覚める7月のように

うつむくなかれ

あなたの目は光をはじく

未来を探る手掛かりの如く

摘んでは枯れ

枯れては摘み

ステンドグラスにひざまづいている

ここにいます

だいぶ涼しくなりましたね
ご覧 陽がおちるのです

ねえ 全てを司る様に
夕闇が つんつん 僕を吸い込んでゆくよ

建築^{ビル}をご覧

ああ 冷たいね
僕そつくりだから とても不安定

電柱をご覧

たくさんの線^{コウゴ}でつながっているよ
ひとりでは何も出来ないのだ

星が出たよ 木星^{ジュピタ}だ

青白い炎だ
弧を描いて僕を呼んでいるよ

大きな空だね

翼がほしい

そうしたら僕 ぜんぶ捨てて戻らない
あすここに輝く銀河へゆくのだ

寒いだらうね

さあ夜露がおりるよ
戻らうか

青白い炎が まだ燃えている

いしき

起きているとはっきり自覚していても

目に何かビニールでもかぶさっているように

ふやふやとなる意識がある

まばたきの速度も落ちて

時計だけが恨めしいのだ

音の無いうつろな場所を僕は知っている

幾重にも閉ざされた深海のような意識

外から聴こえるラジオがかろうじて

目を開けさせている

僕はもしかして眠っているのだろうか

自覚ってなんだろう

つまりは自分しかわからないこと

字を書く速度もどンドン落ちて

自分でいま書いていた文字すらぼやけてゆく

飛行機の大きな音がして外を見た

さっきまで晴れていたのに

今はまるで僕の意識のようだった

s o l l e n

すべては止まっている と お前は吐いた
異常なほどにまで高まる矯激だけが流説している と
有象無象に埋まってゆくことがすでにわたしのお仕着せである と

果たしてそういうことなのだろうか
希望や信じる心などあまりにも一般的な言葉では云わないけれど
少なくともいささか退路を有していたがやはり自らを欺瞞している
だけに過ぎないのではないのか

堂々巡りなのである 精神がいつまでも と お前は呟いた
具眼と見栄を張り義軍でありたいと願いしかし結局のところは灰燼
でしかないのだ と

アイデンティティと調子づいて何もかもを被けてきた結果なのだ　と

拗けていることは認めよう

しかしだからといって落はんを続けてはならないのだ
恩愛が微塵も無い訳ではないはずだ

夜明けなど来なければ良い　と　お前は叫んだ

ばかばかしい自己に慄然とする　成るはずも無い豁然を夢見ている
と

多分いまでもわたしはとち狂った刹那主義者であるだろう　と

もしわたしが全力で反撃したとしてお前は血を流すだろうか

この広い満天下でお前はわたしを大きく支配している

異存と依存で出来たお前をわたしは打ちのめすことが出来るだろうか

また然らぬ体をするのだろうか　と　お前は囁いた

躊躇はわたしを毒で充塞する事の邪魔ばかりするのだ　と

一生このままで良い　下らない瑕疵をわたしは愛しくおもうから　と

疎ましく感じる自己も他もそれすらが心地良いのだ　と

徒浪あだなみを引きずっていつまでも結ばれていよう　と
それでわたしは大満足である　と

ハシルハシル

パンク修理しています

ぷーく ぷく ぷく ちん

つーてんかくへ参ります

こちら新世界

知ら ん

でけ　へ　ん

カメラ売ってますか？

いそげ　いそげ　たすけは　ないぞ

まちがって　御堂筋線に乗ってしまい

なかもず　ゆきです

かた　かた　ふう~~~~ん

ぷーくぷく　ぷく　らん　らん　らん　らん

飛び越えろ山

地下鉄ようなれ

つりかわ ゆうら ゆうら

ふあん ふあん ふあん ぷくぷく

あのひとに ついていきたい

梅田の阪急 むらさき 阪急

かったん かたん

きっと鋭利な夏のかぜ

ぷく ぷく ぷく

らん
らんら

ん

あ
バラ公園

ただいま帰宅中

どうぞ

彼よ人の強さよ夜明《アスラン》よ

胸の十字架クロスを落としてしまったんだ
はかりしれない睡魔に負けたんだ
ビードロの破片を突きつける僕だから
あんたはおびえた手つきで僕を撫でるのかい

噴出する血の勢いで地球を1周出来るのならやるさ
おもいきりちからを込めて握ったそれが
カミソリだから通れんのかい

縫えるならまかせてやるよ
心理作戦と有限とばいきんと
注射するなら消毒いいから
かがみ割れてるし 口から何か出てますよ

押すと痛いんだ
山積みの選択肢にひるんで
胸の十字架クロスを落としたんだ

アッシュのようになりたいのに

すなのしろ

そらよりもたかくて
うみよりもふかくて
かぜよりもはやくて

そんなげんしょうをぼくはしっている
そんなこういをきみはみている

それはとてもまちがったげんそうで
いくつになってもかわることのないすなのしろ

それはわずかなかげをおとして
あつというまにとけてゆくすなのしろ

しあわせなんてどこにもない
ひとそれぞれちがうものだというのなら
ぼくのもとめるしあわせなんてげんそうは
どこにもない

ぷつぷりとおもいえがいていたげんそうがとだえて
ぼくはきみにあやまらなきゃいけない

それはとてもかしんしてしまったみらいで
ときがたてばとけてゆくすなのしろ

それはとてもばかなせんとくをした
くりかえしまなぶことのないすなのしろ

とめるすべなんてどこにもない
ひとりひとりのいきだというのなら
ぼくのことをはいがつぶれてもくびだけになっても
とめてみる

それはわずかなころのつけがたまつたよるに
はじけるようにきはつしたすなのしろ

すなのしろ

短いどらむぢやん？

「電光石火」

メカニズム

意識を飛ばすための

見えてしまったのです

記憶を患うのに

裁判長よ

有名な義務

無意味な攻撃

いくらでもよろしいです

いくらでもお受けいたしましょう

人間とは

いかに あついのか

ファンファーレ

自我を淀むための

聴いてしまったのです

心理を回復するのに

身代わりよ

高度な受身

無感動な特権

すきなだけかまいません

すきなだけお与えください

人間とは

いかに おもいのか

「ソラ、もしくは大気圏」

透明な名の有る旅団は

七色の水滴を目からこぼしていた

やんわりの肌雨にぼやぐのは電灯

蒸気を押し巻いてビードロは色褪せて
うす汚れたトランクのほこりで描いた
息の詰まる要求が集う

優しいのは無意識にかぐ
咽返る圧迫を持つ化学薬品だけ

ホンネ

背伸びをしていた

すこしだけ慢心でひとりよがりで強がってばかりいたんだよね
宿世を想って振り返り生きてきた 世界は全部つねに僕から遠ざかる
傷ついた事はない 今でもそう思っている
激痛を伴う勇気も ずっと眠りゆく

もしも誰もがみな僕を否定してもいいさ
僕には僕がいる
あきれかえるならば醜い僕を斬ってくれ

ありがとうの胸は
ちゃんと持っているさ そんなに僕は見るに耐えぬほど許せないか
い？

素直な意見はそのまましまうけど確実にそれは僕のエネルギーにな
ってゆく
慈しむ気持ちってどんなの？ 今でもまだわからない

腐りゆく価値観だけでも僕の証なのだ

もしも誰かがいま僕を必要とするなら全て与えていいよ
苦しんでいるなら全身全霊で助けになりたい

待つ人がいる誰かのために
犠牲も罪もみな引き受けて僕が守ってあげる
交換してあげる

僕が死ぬ前に誰かの助けにはなれないのか、？

守護者のよき傲慢

か細い吐息のごとくゆらめいているのなら踏みつけて消して下さって構わない

悠久の蒼天・濃い霧・赤い夜・闇無き窓辺・灯り無き海辺

何処まで這いずり回れば良いのか重たいこの暗く立ち込める妖気の渦よ

演技をしておられるのならばどうぞ吐き出してくださいさりますよう

散りゆく命の様に儚む心がひどく滑稽だとあざ笑うのなら

僕の中に僕は一体何をどうやってのこしたら良い？

ねじ伏せる事でしかその憤りを鎮められぬならば

一生に一度きり天駆ける使者と言葉を交わせると信じていたい

熱くたぎった神経の如く高鳴る喜びが叫んでいるのなら殺してください
さって構わない

追憶の宴・良い嘘・迷い恥・愛無き腕・殺意無き絵画
かいな

何処まで続いてゆくのか光と影の隙間をぬう永遠を請い願う葬列よ
沈黙を守護される方針ならばどうぞ無視してくださいますよう

夢映像

優柔不断な自分が嫌になる

いい加減にしたまえ

もう何時間経ったと思っているんだ？

八方美人の自分が嫌になる

君の下した決断がそれか

溶けていくのは慣れましたとでも？

他力本願な自分が嫌になる

どうせってまた思うのだ

いつまで経っても陰の住人か？

この世なんて夢映像
ドラマチヨン

与えられるのを待つのは反対だが

掴み方がわからないんだ

自信なんて沸いてこなくて

脳にカビが生えているんだ

人を本当に生き物として見ていないのだと

時々自分を恐ろしく感じる

まちがえたくないんだ

恥をさらしたくないんだ

樂をしたいんだ

もてはやされたいんだ

世界なんて僕のまわりだけの夢映像ドラムチヨン

融通なんていちども効かない

ふらふらしてホームに落ちるよ

後始末くらいやってのけるさ

クタニス帝国

そこの曲がり角で拾ったんだ
才能と可能性は微動だにしない

そこの白い家に誰か住んでるんだ
洗濯物が眩しく光って

ほこりっぽい風も湿度のみこんで

飛行機雲

待って待って 走っているのに

狂想曲　なんて　違い空

伝えて欲しい
ぼくはもう戻らないと
涙ってなに

ああ　カーチダンの　駅に立つ

いつか廊下で拾ったんだ
楽譜と濃闇で満たされた女神

あの黒い椅子に誰か座ってるんだ

分厚い本が夢を語って

消えかけたらうそく命を燃やして

追悼式

歩いて 歩いて 脚があるのに

鎮魂歌 なんて 昂鳥

渡して欲しい
ぼくの持つ全ての花を
傷負って害

ああ クタニス・ティンカー・スウを 抱く

京へ

夏の午後届いた電報 最終警告

偽善者の皮は もう はがせない

周りを取り囲まれようと逃げるつもりはない

熱気の中 一人のぼった伏見稲荷

耳をふさいでも蟲達は囁いてくる

帰れなくなってもむしろそれこそ 本望

つるてんたーら

ねーべんにーえ

かるまもにつが

へいだるうおりが

夢にまでみたうつくしい静けさ

恋焦がれて古い神社

照り返すアスファルト 白昼夢

結界を越える術があるかい

続く静かな赤に酔う

共鳴するせみのこえを全身で吸い込んだ

引き下がるつもりはないはずだった

おねがい。

月にも見限られてしまったのか 今夜も飛翔べないらしい

明るすぎる明日を想っても 翼は未だに透明のまま

わたしにどうか最も重い色を 潰される感触を与えて

うつむいてばかりだけれど 銀河のゆらめきは承知している

夜にも拒まれてしまったのか 名前も呼べないらしい

埋められたはずの栄光の 目覚めはもう信じてない

あなたにどうか最も緩い恥を 許される回復を与えて

うつむいてばかりだけれど 月光のまばゆさは熟知している

あふれかえるだろう

両手がこんなにも痩せている

未来からの行く手をはばむ 時空を超えた唄

わたしにどうか最も重い色を 潰される感触を与えて

さくろまるかん。

さくろまるかん。

うみだせるよかん。

はやがねのこどう。

うちつけるおそれ。

さくろまるかん。

あふれでるよいん。

おぼろねのまほう。

のびいさむおそれ。

さくろまるかん。

うばわれるじかん。

あやかしのもぞう。

いしずえにいのれ。

さくろまるかん。

うやむやにつどえ。

なつかしみほろえ。

とこしえにあゆめ。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

さくろまるかん。

別離

夜明けの街並み

肌透きとおり黙ったままの星は大気に吸い込まれていった

目を伏せているのは光が疎ましいから？

それとももうここにはいられないと知ったから？

知りもしないうちに はなれてしまうのさ、

眠りを恐れた日

触れられない現象静か過ぎる空が負けてゆく

終わらないで 黙ったままでそんなの勝手だ
約束も生きていたのにカケラもみつからない
ちいさな箱に収まってないで でかけようぜ
眠りにつくにはまだ早すぎるから

さあ いますぐに 蘇るんだ

虹を追いかける

我を忘れてひたすらはだしで丘でも崖でも越えてゆく

旅立ちを教えないのは闇が腕をはなさないから？

それとも僕が君を忘れているから？

知りもしないころに 泣いてしまうのさ、

終わらないで 振り向きもせずに微笑んでいる

こんなに爪痕をのこして星を降らすなんて

終わらないで 未来があんなに待っている

ああ そうか ひとつの正解

これも未来につながる出来事

終わらないで このつながりを ループを

白銀世界

目の前が真っ白になること 真っ先に痕跡をのこしたくなるあの衝動

天は高く太陽は弱りわたしは消えかけるほど興奮する

吐息が診え肌に刺さる空気を肺は受け入れない

深呼吸すること 歩くこと 純白を否定しないこと

等価値は黒い煙のように結晶を考える

キキリ キリ

手首を締め付けるあなたはだれなの

動くものが見当たらず足元は疎ましいくらい光ってみせる

歩かなくては ここから去らなくては 早く 早く

風が吹けば粉舞いあがりわたしの首筋で簡単に溶ける

いつまでも このままで あれば良いのに

わたしの前を歩く誰かに 太陽は一層弱ってゆく

まぼろし

ガラス張りの部屋いっぱい緑

太陽の攻撃はまともに降り注がれる

薬剤と液体で沢山のガラス器具

零れた紅い汁に落とされたままの白衣が染められた

にぶく光る銀時計が奥の暗い貴方を照らす

対する明暗に瞳孔はふらつき

貴方が手にした美しい陶器に浅く波打つ紅い汁は

その細い喉の深くへ消えて行った

多くのしおりが挟まれた巨大な植物図鑑

開かれたままのペエジがめくれた

天窓から流れ込む熱っぽい空気が

調べたばかりの紙切れを遊ばせてしまう

光が惜しみなく注がれるガラス部屋を

眩しそうに何か苛立つように眺めた

時計は十五時を告げた

壁に乱暴に張り巡らされた地図の金の文字を

指でたどって闇に笑う

夢物語 痛みの有る場所を指されても

お前は胸を張って探す事を辞めずにいられるか？

応えは無い

植物は微動だにせず白衣は休むことなく紅く成るだけ

音も無く焼けてゆく空気に瞬く陽光

気付いてしまったのだ

屈折するだけのグラフには飾れない

決して逢うことの叶わぬ種が

何よりも貴方を蝕んでいることに・・・

突然 割れる音がして太陽は去った

一気に冷気を帯びる空間に錆びついた銀時計が

幻を観たこの実験室に与えられた終わりを静かに伝えている

貴方は跡形も無く失せきり

紅いはずの白衣は黄色味を強調している

金の砂が僅かに落ちているようだ

それ以外は水槽のなか

地図も もう 読めない

ビー玉 飲んで 瑠璃 ひとつ

知らない文字の修羅 ふたつ

針から 鍵穴 咎 みつつ

世の謎 物品 論理と 滑稽

流血淋漓の 電子線

トランプ 出血 花 よつつ

病室 点滅 虹 いつつ

世紀末 イド 粉 むつつ

輪廻 徘徊 反抗期 否

空虚を好んで 破滅へ 行進

零時を恨んで 留 ななつ

資格 失格 骨格 やっつ

バターが死して こここのつ

遠とお

や、と

ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、

九、十

壱、弐、参、四、五、六、七、八、

うじゅう

いちにさんしごろくしちはちきゅう





ヒロイズム

笑えばいいよ

アナクロニズムは承知の美学

君が僕に勝るといえるのか？

唱えよ paradox

来たれ climax

酔いと狂気が呼んでいる

考えてきたよりずっと良い未来

去るつもりはないんです

ストリキニーネを飲んだ僕

いつだってそこは照明のない

舞台のはじめのしたのほう

座るつもりもないんです

プロパガンダに果てる僕

プロテストしかしない僕

心残りなら腐るほどあって

血戦には応じます

モラトリアムを捨てる僕

徒死したとしても

割と本望

導いてよ ゼレンマ

あの日々へ

あの日々へ

自分勝手に仕掛けるケーブル
要らない 邪魔だ どっかいっちまえ

爆弾抱いてトイレにこもれよ
うすいうすい膜で護ってアゲル

蜜蜂のつもりでばっかじゃねえの
わた腸を絞っていますぐ送りつけてくれる

すみわたった蒼い顔
如何せんゴミだらけの6畳間である
アキレス腱ぶち切って虚仮と笑えよ
手緩いだけのダイアローグ！

問題なんか解けるわけない
錆びついた歯車がそんな程度で動くわけない

伸びちまいやがって Tシャツの首
切り札隠して逃亡してくれる

暇つぶしに 悪く思ふなよ

何故ですか

ではあなたは自分が悪いとこれっぽっちも思っていないのですね？

彼はたぶんそう言ったと思った

ただなんとなく彼の着ているひどく白い白衣が

あたしを意味も無く照り付けているような気がして

アロエが枯れそうですよ

窓辺の大きくて茶色いそれが気になったりして

あたしは膝まで浸かっている泥をもぞもぞした

自分が悪くないかどうかを決めるのはあなたではありません

それを知る第三者ですよ

気が付くと彼は真っ黒のタキシードを着て

天井近くの柱時計のなかにいた

はあ　ですよね

コンクリートのように重い脳みそ

汚れたくてもこんなことになっているあたしは

たくさん歌をつくっておけばよかったって思ったり

たぶん　きつと

そんな事。

はだしのワルツ

真夜中の電波ラヂオにのつて 癸ミズノトの夜明けは降りやむであらう

僕はどうしてあすこをゆくのでせう？

電飾器ネオンも秋桜コスモスもただ存在理由イルイミをわかつて貰ひたくて

蝶々《テフテフ》もあの天空ソラに架かっているまるで蜘蛛クモの巣のやうな

不安定に視線を放はな電動画像回線モノデムに捕獲サラワれるであらう

めつきり沈んだ天

とほい決心もうしなひさうです

今日ケフも明日も僕はこのうへをゆくことは無いだらう

はねあがつたりはしつたりしたいのですが

だうも僕に出来さうぢやないです

踊らう

こんな夜は 皆で いつせいに

さう ワルツを

らうそくの炎のやうな揺らめきもとほく

待ち構へるは夢の向かう側

ちいさくなってどかん

脳が割れる

暗い世界へ今すぐ消えてしまいたい
蘇ってしまったこの収まらない苛立ちの蛇

何故こんな場所にいらなくてはならない
一刻も早く立ち去ろう もう 忘れて欲しい

神経も幻覚も細胞も妄想も骨も声も皮膚も内臓さえも
その全てを限界まで絞って美しくなくても構わない
私にも何か輝くような認められるような受け入れられるような
そんなものが造り出せたなら

こんなにも馬鹿みたいに書き殴らなくて 済んだ

努力も方法も原因も計画も夢も道も標識も左右さえも
もうどれも思いつかないくらい自分を見失っている
私には何か残された手段や忘れているちからなどきつと
何も無いのだろう

こんなにも死んでいる 弱っている

自由な僕

ひとりって さみしいことだったんだ

すごく自由で好き勝手やれて

いつまでも眠らなくていいしどこへでも行けるけど

話す相手も

理解してくれる人も

一緒に笑ってくれる人も

いない

なにかも自分で産みださなければならぬ
かえるばしょものしい時間にあたたい夜も
なにかも。

ひとりって こんなにもさみしいことだったんだ

だけど僕のいていい世界はどこにもない

それをつくるのも疲れちゃった

どうしたら解放された僕をひっかかることができるのだろうか

くらい詩。

ジョゼさんはたぶん産まれてはいけなかった

他の人と同じ価値もない

でも他の人よりずっと頑丈でずっと大丈夫でずっと長く生きてしまう

そんな気がする

ジョゼさんさえ産まれなければ

ジョゼさんさえこの世界を泳がなければ

2人には違った未来があり違った家族があったはず

ジョゼさんはたぶん〇年も生きてはいけなかった

生産性のない工場長

たいしたことのないことも大げさに大ごとにして

大切なものもみつからないままこんな遠くまできてしまった

〇年もこの星で生息してはいけなかった

〇年もこの大気を吸ってはいけなかった

ジョゼさんはたぶんジョゼさんでいてはいけなかった

ジョゼさんはたぶん「ジョゼ」さんを演じてきた役者だった

ジョゼさんにもたぶんこの化けの皮の下の生き物がなんなのか

きつと何時までもわからない

邂逅

探した切符を手に
どこまで行こうかな
銀河鉄道に乗って
僕だけの場所をめざす

月よりずっと遠く
魂在る限り進む
どこまで行ったらいいの
カムパネルラに会える？

お願いだ

連れてって

記憶さえ

失くしていい

横切る光が減って

永久の闇を迎えても

消えない傷跡だけが

呼んでる声 感じてる

誰もいない楽園

求めたものはなんだろう

切符をなくしてしまった

朽ち果てた幻想

癒して欲しいんじゃない

逢いたいんだ あのひとに

どうか耐えているから

このままここにいさせて

わたしは眠っているかしら。

歩き出した夜にみんなの顔が浮かぶわ
どんなに呼ばれてももう振り向きはしない
導かれるままに扉の向こう側まで
誰にでもあるはずの明日が恐ろしくても
すれ違う光を手を伸ばしてつかまえる

きつといつかおおきなちからとなって
だれかにふりそそぐでしょう
はなびらのように優しく音も無く
囁くように静かにひたすらに

頂いたすべてを肌で受けた
そのときわたしは眠っているかしら。

今ならば解るわたしの産まれた意味が
わたしには待っている優しいあの部屋がある
もう疲れたなんて言いたくないの
誰にでもあるはずの昨日よりもっと良いせかいへ
避けられぬ言葉を受け入れて抱き寄せる

きつといつかおおきなちからとなって
あなたにふりそそぐでしょう
内から芯となりつよくあるがままに
まえを向くよう静かに背を押して

よみがえるなにかを脳で呼んだ
そのときわたしは眠っているかしら。

落としたら割れてしまうような
そんな繊細な居場所に隠れて眠っているのかしら。

月の舟

近付いてみては 離れてゆく

つながってみては ほどけてゆく

月を廻る舟にどうぞ乗せてください

見えないの

あのとき知った答え

離れても解るの あのときの罪だけ

夢の中

跡形もなく溶ける

冷たいの

あたしの手

月の舟

どうぞ乗せて

星のかなた月めざして

描く旅路ふるえるその指先で

指し示しすの ほんとうの天上を

微笑んでいるの 哀しんでるの

瞳を伏せたまま 貴方はなぜ

月を廻る舟をとめようとしなの

星たちは

静かにまたただけ

離れても解るの あの日々の罪だけ

夢の中

あといくつ覚えてる

連れてってよ

あなたまで

月の舟

どうか止めて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874j/>

どらむぢよん

2010年10月11日18時00分発行